

# Over70 三県リーグ山梨大会応援遠征の記（2025年10月31日）

土屋昌弘

## はじめに

思い起こせば50余年前です。筆者所属の少年団チームの紅白戦。練習参加の矢崎計器・坂本義久氏（現三県リーグ副会長）は左ウイングで参戦し、二軍 CF の筆者と前線を構成。以来のご縁です。今回も契機は坂本氏のお誘いでした。筆者としては、地元の藤枝チームの応援はもちろん、山梨県のサッカー場と施設の見学も動機となりました。そして、昨年6月に亡くなった父の山梨サッカーとのご縁も背中を押してくれました。

## 父の山梨遠征

父は藤枝の志太中学（旧制）に入学し、藤枝東高校（新制）の一期生として卒業した戦中派でした。サッカー部に属していて蓮華寺池の周りを死ぬほどに走らされたそうです。静岡高校（現静岡大学）にも勝つたらしいので、当時の志太中学はすでに相当な実力を備えていたようです。松永三兄弟（長

兄がベルリンオリンピック（1936年）得点者）があこがれたったとも申しておりました。

父は国体県予選で優勝、山静大会に臨んだものの甲府一中に敗れてしまい、国体出場は成らなかったようです。国体少年は昭和23年から各県代表制となりましたので、父の山梨遠征は昭和21年または22年と思われます。戦争直後で、食糧難など大変な時期だったと想像されます。

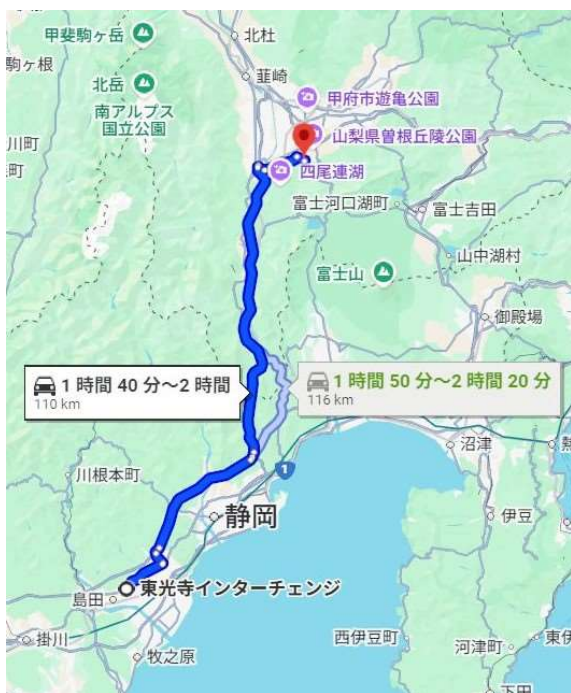
それから約80年、息子による山梨県サッカー遠征となりました。本寄稿のお誘いには「素人が、」と恐縮至極で固辞する積りでした。が、せっかくの機会と考え直し、立場を顧みず蛮勇を奮いました。読者の皆様には駄文のご辛抱を乞う次第です。

ただ、素人でしたがサッカー観戦には励んできました。特に大学院生の頃。1985年国立競技場では木村和司選手の伝説のフリーキックや石神良訓選手のヘディングクリアをバックスタンドで生観戦。西が丘の大学サッカーにもよく通い、とんでもなく速いドリブル疾走の向島建選手（国士大）やサイドバック起用の中山雅史選手（筑波大）をタッチライン間近で目撃したりしていました。

## 山梨遠征経路

中央市の当日天気予報は「曇りのち雨」でした。が、坂本氏の晴れ男伝説を信じて自宅を出発しました。近くの東光寺 IC から国道一号藤枝バイパス、藤枝岡部 IC、新東名、新清水 JCT、中部横断道、増穂 IC を経て中央市に辿り着きました。会場は YSKe-com シルクパーク。その入口のひとつ手前の交差点を左折してしまい、周囲の農道を一周してから到着したのは秘密にしておきます。

往路の途中、中部横断道から初冠雪の富士山が大きくきれいに見えて感動しました。富士川街道（52号線）は数度、建設途中の中部横断道は一度、それぞれ、利用経験がありましたが、新清水



遠征経路。Google マップによる作図です。



熱戦を遠くから見守る北岳と間ノ岳。

JCTと双葉JCTの間が全線開通してからの中部横断道は初めてでした。渋滞も無く、とても快適なドライブとなりました。

一般道では大河の合流を初めて体感しました。従来は笛吹川と釜無川を別々に捉え、富士川の支流と感ずることはありませんでした。今回、両河川の合流点に近い増穂ICで高速を降りると、「□△橋○詰」という交差点を何度も通過しました。その頻度に両河川の合流を体感しました。この規模の河川合流、静岡では経験できません。

帰路では道の駅「とよとみ」に立ち寄りしました。名産の「甲州富士桜ポーク」をカツカレーでおいしく頂いたことを付記しておきます。

## ピッチ

駐車場からピッチに向かうときれいな人工芝とその周囲の天然芝が目飛び込んできました。曇天微風で気温も低めという絶好のサッカー日和。



日本三名峰眺望遊歩道の看板。

小高いベンチ席から応援する女性達には山梨大会の華やかさを感じました。

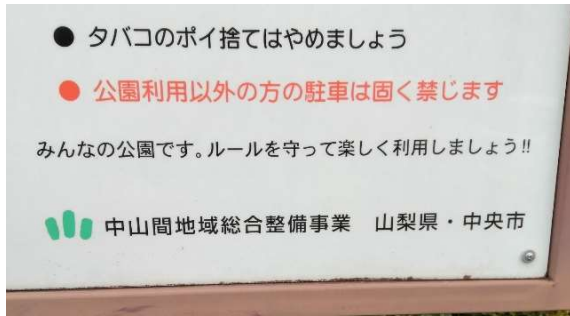
ピッチの周囲を歩いてみると、水飲み場があり、売店があり、トイレも広く、とても整っていて素晴らしい施設と感じ入りました。立派なナイター照明も備わっていました。更衣室とシャワーのチェックは怠りましたが、おそらくは、十分な整備が連想されます。

筆者の眼を特に引いたのはピッチ周囲のネットに取り付けられた数多の企業CMフラッグでした。聞くと、関東から試合に訪れる多くのチームに対して広告効果が認められるのだそうです。「東京23区の高井戸ICから（渋滞が無ければ）90分」という立地は、首都圏のグラウンド難民からみれば垂涎的でしょう。子供たちの大会も開催されるとのこと。平日の夜間練習への活用も想像されず。日本のメッシや将来の澤穂希がここから誕生するのでしょうか？

ピッチから西に目を転ずると、左に櫛形山(2052m)、右に千頭星山(2137m)のV字稜線。その合間の雲の向こうにそびえる北岳(3193m)と間ノ岳(3190m)。登山を趣味にしていた筆者は両山頂に立ったことがあります。北岳ではブロッケン現象も体験しました。また、間ノ岳は大井川の源流です。海に注ぐ河川の水源としては日本一の標高とのこと。毎日頂く水道水にこの名峰からの水が含まれる幸福を考え、新たな感慨が湧き上がりました。

ピッチの周囲に設置された看板も印象的でした。この施設は「日本三名峰眺望遊歩道」の起点としても位置付けられるようです。駐車場は遊歩道の散策者にも役立つはずで、一石二鳥の精神が窺われます。ちなみに、三名峰とは富士山、北岳、間ノ岳とのこと。上記の様に北岳と間ノ岳は目視しましたが、ピッチから富士山が見えるかどうかの確認は怠りました。残念です。

別の看板には「中山間地域総合整備事業 山梨県・中央市」の文字がありました。この事業は、

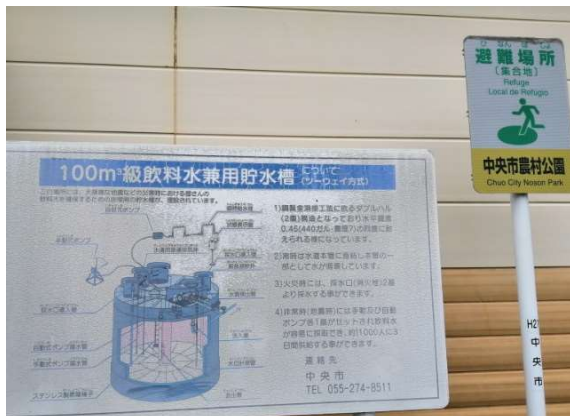


中山間地域総合整備事業の看板。

現在、農林水産省の中山間地域農業農村総合整備事業（補助事業）という制度になったようです。行政との連携によるサッカー場運営が窺われ、地元のヴァンフォーレ甲府が天皇杯制覇の偉業を達成したのも周囲の支援の賜物だったと推察されます。

ピッチの入口近くには中央市の「避難場所（集合地）」の標識がありました。一石二鳥ではなく三鳥ですね。的確な英語とスペイン語の併記。避難を表すとされる単語「Evacuation」に違和感を覚える筆者は「Refuge」の表記を適正と感じました。

その横には 100 m<sup>3</sup>級飲料水兼用貯水槽の説明看板が設置されていました。筆者在住の島田市にも 100 トン級貯水槽が多々あるようですが、「飲料水兼用」という表記は見当たりません。水道水が常に循環されていて、災害時の急な飲水需要にも対応できる特長があるようです。震度7にも耐える耐震性も頼もしい限りです。



避難場所の標識（右上）。英語とスペイン語も併記。左下は 100 m<sup>3</sup>級飲料水兼用貯水槽の説明。



試合の一場面。

### 試合観戦

肝心の試合ですが、、、選手の皆様はトップレベルを経験された方々です。個々の「止める・蹴る」の技術はもちろん、声掛けや走力、戦術も高レベルと拝見しました。得点の歓喜も目撃できてとても良かったと感じました。際どいオフサイド判定にもレフェリーの裁定が尊重され、順法精神の清々しい空気が周囲に溢れていました。

ただ、主審の優雅なランニング姿に見とれてしまったためか、施設の探索に時間を割いたためか、正直なところ、観戦の方はかなりおろそかになったようです。大変に申し訳ありません。

さて、上記写真の右上奥に見えるのが、おそらく、十谷峠方面ではないかと思われます。明治の初期、そこに築かれた伊奈街道は、麓の切石から大井川上流の二軒小屋を経て信州伊那谷に至る交易路とされたそうです。「伊」は伊那、「奈」は奈良田を表し、駿河湾の海産物を伊那の皆様へ届けるために企画された山道だったとのこと。三県リーグにふさわしい背景と改めて感銘を覚えた旨を末筆とします。ありがとうございました。

筆者：静岡県島田市出身・在住。1960 年生まれ。カリフォルニア大学客員研究助手、東京大学助教授、情報通信研究機構上席研究員を経て、現在は親の介護。



その傍らで島田市岸・大日山毘川寺の総代を仰せついています。島田科学技術教育振興会会員。女子サッカー応援ブログ「がんばれ なでしこ」を執筆・公開中。写真は近所の東光寺谷川のカワセミ（筆者撮影）。